

【 復活のトロパリ 第6調 】

てんしのぐんなんぢのはかにあらわれしに、  
 天使 軍 爾 墓 現

ばんぺいしせしもののごとし、マリアはか  
 番兵 死 者 如 墓

にたちて、なんぢのいさぎよきからだをたづね  
 立 爾 潔 體 尋

たあり。なんぢはぢごくにいざなわれず  
 爾 地 獄 誘

して、ぢごくをとりこにし、いのちをた賜  
 地 獄 虜 生 命 賜

もうものとして、しよぢよにあいたまえり。  
 者 處 女 逢 給

しよりふくかつせししゅよ、こうえいは  
 死 復 活 主 光 榮

なんぢにきいす。  
 爾 歸

【 日本の亜使徒聖ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう  
 使 徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい  
 實 神 智 役 者 聖

なるしんにえられたるふえ、ハリストスのあい  
 神 撰 笛 愛

に み ち た る う つ わ 、 わ が く に の こ う  
 満 器 我 國 光

し ょ お し ゃ 、 あ し と し ゆ き ょ う せ い ニ コ ラ イ  
 照 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ 、 な ん ち の ぼ く ぐ ん の た あ め 、 お よ び  
 爾 羊 群 爲 及

ぜん せ か い の た め に 、 い の ち を た も う せ い  
 全 世 界 の 爲 生 命 を 賜 聖

さん しゃ に い の り た ま え 。  
 三 者 祈 給

【 日本の亜使徒聖ニコライのコンダク 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ お と せ い し ん に き  
 光 榮 父 子 お と 聖 神 歸

す 、

せ い せ い し ゃ あ し と せ い ニ コ ラ イ よ 、 わ が  
 成 聖 者 亜 使 徒 聖 我

く に な ん ち を た び び と お よ び い ほ う じ ん と う け  
 國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受

し に 、 な ん ち は は じ め わ が く に に お い て お の  
 爾 は 初 我 國 に 於 己

れ を が い ら い し ゃ と し り た れ ど も 、 ハ リ ス ト ス の  
 外 來 者 知

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて  
 光 暖 たかきをながし、なんぢのて  
 敵  
 きをぞくしんのことなあし、かれらにか  
 属 神 子 爲 あし、かれらにか  
 神  
 みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて  
 恩 寵 與 教 會 建  
 たり、いまこのきょうかいのためいのり  
 今 此 教 會 爲 祈  
 たまあえ、けだしわれらそのしよしはなん  
 給 あえ、蓋 我 等 其 諸 子 爾  
 ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ  
 呼 我 善 牧 者 慶  
 べよ。

【 復活のコンダク 第6調 】

いまもいつうもよよに、アミン。  
 今 何 時 世 世  
 いのちのげんいたるハリストスかみはいのちを  
 生 命 原 因 神 生 命  
 ほどこすてをもつてしせしものをくらきた  
 施 手 以 死 者 暗 谷  
 によりいだして、ふくかつをじんるいに  
 出 復 活 人 類

た ま え り 、 し ゅ う じ ん の き ゅ う せ い し ゅ 、 ふ  
 賜 衆 人 救 世 主 復  
 く か つ と い の ち 、 お よ び し ゅ う じ ん の か み な  
 活 生 命 及 衆 人 神  
 れ ば な あ り 。

司祭) ( 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
 ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と  
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、  
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔  
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な  
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讃榮を奉るに堪うる者と  
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と  
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる  
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世  
 に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る  
 聖 神 聖 勇 毅 聖

じょうせいのもものよ、われらをあわれめ  
常生者我等を憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい  
聖神聖勇毅聖

なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ  
常生者我等を憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
聖神聖勇毅

せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ  
聖常生者我等を憐

れめよ。こうえいはちとことせいしん  
光榮父子聖神

にきす、いまもいつもよよに、アミン。  
歸今何時世世

せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ  
聖常生者我等を憐

れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう  
聖神聖勇

き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを  
毅聖常生者我等を

あわれめよ。  
憐

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國



こうえい ほうざ あ つね あが ほ いま いつ よよ  
の光 榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、 )

【 プロキメン 提綱 主日第6調 】

司祭) 慎みて聴くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、爾の民を救い、爾の業に福を降し給え、

しゅよ、なんちのたみをすくい、なんちのぎょうに  
主 爾 民 救 爾 業  
ふくをくだしたまえ。  
福 降 給

誦經) 主よ、我爾に呼ぶ、私の防固よ、我が爲に黙す母れ、

しゅよ、なんちのたみをすくい、なんちのぎょうに  
主 爾 民 救 爾 業  
ふくをくだしたまえ。  
福 降 給

誦經) 主よ、爾の民を救い、

なんちのぎょうにふくをくだしたまえ。  
爾 業 福 降 給

【 アポストロス 使徒經 116端 ロマ書15章1~7節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パウエルが羅馬人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聴くべし、

誦經) 兄弟よ、我等強き者は強からざる者の弱きを負いて、己を悦ばしむる可からず。我

らおのおのそのとなり よろこ ぜん もつ そのとく た いた けだし おのれ  
等 各 其 鄰 を 悦 ばしめ、善 を 以て 其 徳 を 建つる を 致すべし。蓋 ハリストスも 己 を

よろこ すなわちしる ごと いわ なんぢ はづかし はづかしめ われ およ  
悦 ばしめざりき、乃 録 されしが如し、云く、爾 を 辱 むる 辱 は我に及べりと。

およ むかししる もの みなわれら をし ため しる われら にんたい せいしょ なぐさめ  
凡そ昔 録 されし者は、皆 我等を訓えん爲に録されたり、我等が忍耐と聖書の慰藉と

もつ のぞみ まも ため ねが にんたい なぐさめ ほどこ かみ なんぢら  
を以て 望 を守らん爲なり。願わくは忍耐と慰藉とを施す神は、爾等にハリストス・

したが たがい おもい おな たま なんぢら ところ いつ くち いつ  
イススに 循 いて 互 に 意 を同じくすることを賜わん、爾等が心を一にし、口を一に

かみわ しゅ ちち さんえい ため ゆえ なんぢらあいい  
して、神我が主イスス・ハリストスの父を讃榮せん爲なり。故に爾等相納るること、ハ

かみ こうえい ため なんぢら い ごと  
リストスが神の光榮の爲に 爾等を納れしが如くせよ。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) わたしたち強い者は、強くない者たちの弱さをになうべきであって、自分だけを喜ばせることをしてはならない。わたしたちひとりびとりは、隣り人の徳を高めるために、その益を図って彼らを喜ばすべきである。キリストさえ、ご自身を喜ばせることはなさらなかった。むしろ「あなたをそしる者のそしりが、わたしに降りかかった」と書いてあるとおりであった。これまでに書かれた事からは、すべてわたしたちの教のために書かれたのであって、それは聖書の与える忍耐と慰めとによって、望みをいだかせるためである。どうか、忍耐と慰めとの神が、あなたがたに、キリスト・イエスにならって互に同じ思いをいだかせ、こうして、心をつにし、声を合わせて、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神をあがめさせて下さるように。こういうわけで、キリストもわたしたちを受けいれて下さったように、あなたがたも互に受けいれて、神の栄光をあらわすべきである。

\*\*\*\*\*

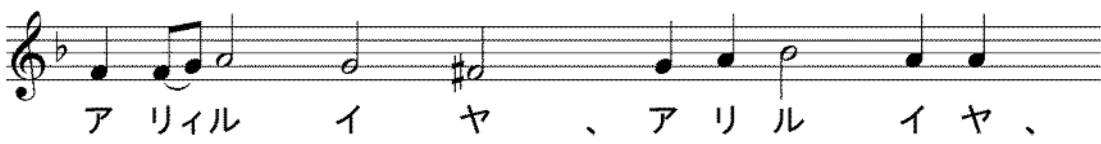
【 アリルイヤ 主日第6調 】

司祭) なんぢ へいあん  
爾 に 平 安、

誦經) なんぢ しん  
爾 の 神 にも、

司祭) えいち  
睿 智、

誦經) アリルイヤ、



誦經) しじょうしゃ おおい した お もの ぜんのうしゃ かげ した やす  
至 上 者 の 覆 の 下 に 居 る 者 は、全 能 者 の 蔭 の 下 に 安 ん ず、

ア リル イ ヤ 、 ア リル イ ヤ 、  
ア リル イ ヤ 。

誦經) <sup>しゅ い なんぢ われ かくれが われ ふせぎ われ たの ところ われ かみ</sup> 主に謂う、爾は我の避所、我の防禦、我が頼む所の我の神なりと、

ア リル イ ヤ 、 ア リル イ ヤ 、  
ア リル イ ヤ 。

司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん</sup> 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

<sup>め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup> の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

<sup>おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ ところ</sup> 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

<sup>おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ</sup> を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

<sup>なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん</sup> 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

<sup>いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ</sup> て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世々に、アミン。 )

【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書33端 9章27~35節 】

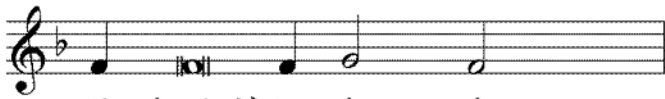
司祭) <sup>えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん</sup> 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。  
爾神

司祭) <sup>でん せいふくいんけい よみ</sup> マトフェイ傳の聖福音經の讀、

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主光榮爾歸光榮





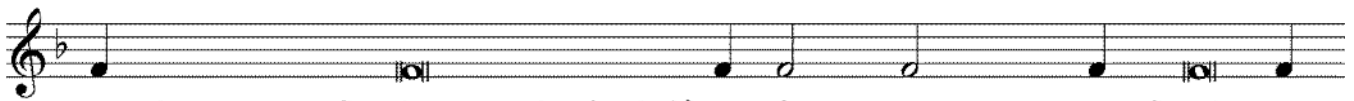
は なんぢに き す 。  
爾 歸

司祭) 謹<sup>つつし</sup>みて聴<sup>き</sup>くべし、彼の<sup>か</sup>時<sup>とき</sup> イスス<sup>ゆ</sup>往<sup>ふたり</sup>きしに、二人<sup>めしいかれ</sup>の<sup>したが</sup> 警<sup>よ</sup>者<sup>い</sup> 彼<sup>い</sup>に 従<sup>い</sup>いて、呼<sup>よ</sup>びて曰<sup>い</sup>えり、ダ  
 ヴィド<sup>こ</sup>の子<sup>われら</sup> イスス<sup>あわれ</sup>よ、我<sup>かれい</sup>等<sup>え</sup>を 憐<sup>い</sup>め。彼<sup>めしいかれ</sup> 家<sup>つ</sup>に入<sup>これ</sup>りしに、警<sup>い</sup>者<sup>い</sup> 彼<sup>い</sup>に就<sup>い</sup>けり、イスス<sup>い</sup>之<sup>い</sup>に謂<sup>い</sup>う、  
 我<sup>われ</sup>之<sup>これ</sup>を成<sup>な</sup>すこと<sup>よく</sup>を能<sup>しん</sup>すと信<sup>かれら</sup>ずるか、彼<sup>い</sup>等<sup>い</sup>曰<sup>い</sup>く、主<sup>しゅ</sup>よ、然<sup>しか</sup>り。是<sup>ここ</sup>に於<sup>おい</sup>て其<sup>その</sup>目<sup>め</sup>に觸<sup>ふ</sup>れて曰<sup>い</sup>え  
 り、爾<sup>なんぢ</sup>等<sup>ら</sup>の信<sup>しん</sup>の如<sup>ごと</sup>く 爾<sup>なんぢ</sup>等<sup>ら</sup>に成<sup>な</sup>るべし。其<sup>その</sup>目<sup>め</sup> 即<sup>すなわ</sup>ち 啓<sup>ひら</sup>きたり。イスス<sup>き</sup> 厳<sup>び</sup>しく 彼<sup>かれ</sup>等<sup>ら</sup>を 戒<sup>いま</sup>  
 めて曰<sup>い</sup>えり、慎<sup>い</sup>みて人<sup>ひと</sup>に知<sup>し</sup>らしむる 勿<sup>なか</sup>れ。然<sup>しか</sup>れども 彼<sup>かれ</sup>等<sup>ら</sup>出<sup>い</sup>でて、其<sup>その</sup>名<sup>な</sup>を 遍<sup>あまね</sup>く 其<sup>その</sup>地<sup>ち</sup>に揚<sup>あ</sup>  
 たり。彼<sup>かれ</sup>等<sup>ら</sup>の出<sup>い</sup>づる 時<sup>とき</sup>、視<sup>み</sup>よ、瘡<sup>おし</sup>にして 魔<sup>ま</sup>鬼<sup>き</sup>に憑<sup>よ</sup>らるる 人<sup>ひと</sup>を イスス<sup>い</sup>に 攜<sup>たづ</sup>え 來<sup>き</sup>れる あり。魔<sup>ま</sup>  
 鬼<sup>き</sup> 逐<sup>お</sup>い 出<sup>いだ</sup>されて 瘡<sup>おし</sup>者<sup>もの</sup> 言<sup>い</sup>えり。民<sup>たみ</sup> 奇<sup>き</sup>として 曰<sup>い</sup>えり、イズライリ<sup>い</sup>の中<sup>うち</sup>に 未<sup>いま</sup>だ 是<sup>か</sup>くの 如<sup>ごと</sup>き 事<sup>こと</sup> あら  
 ざりき。然<sup>しか</sup>れども 法<sup>らい</sup>利<sup>れい</sup>等<sup>ら</sup>曰<sup>い</sup>えり、彼<sup>かれ</sup>は 魔<sup>ま</sup>鬼<sup>き</sup>の 魁<sup>かしら</sup>に 藉<sup>よ</sup>りて 魔<sup>ま</sup>鬼<sup>き</sup>を 逐<sup>お</sup>い 出<sup>いだ</sup>す。イスス<sup>い</sup> 遍<sup>あまね</sup>  
 く 邑<sup>まち</sup>と 村<sup>むら</sup>とを 巡<sup>めぐ</sup>りて、其<sup>その</sup> 諸<sup>しよ</sup> 會<sup>かい</sup> 堂<sup>どう</sup>に 於<sup>おい</sup>て 教<sup>おし</sup>を 傳<sup>え</sup>え、天<sup>てん</sup> 國<sup>ごく</sup>の 福<sup>ふ</sup> 音<sup>いん</sup>を 宣<sup>の</sup>べ、民<sup>みん</sup> 間<sup>かん</sup>の 諸<sup>もろ</sup>  
 の 病<sup>やまい</sup> 諸<sup>もろ</sup>の 疾<sup>い</sup>を 醫<sup>い</sup>せり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) そこから進んで行かれると、ふたりの盲人が、「ダビデの子よ、わたしたちをあわれんで下さい」と叫びながら、イエスについてきた。そしてイエスが家にはいられると、盲人たちがみもとにきたので、彼らに「わたしにそれができると信じるか」と言われた。彼らは言った、「主よ、信じます」。そこで、イエスは彼らの目にさわって言われた、「あなたがたの信仰どおり、あなたがたの身になるように」。すると彼らの目が開かれた。イエスは彼らをきびしく戒めて言われた、「だれにも知れないように気をつけなさい」。しかし、彼らは出て行って、その地方全体にイエスのことを言いひろめた。彼らが出て行くと、人々は悪霊につかれたおしをイエスのところに連れてきた。すると、悪霊は追い出されて、おしが物を言うようになった。群衆は驚いて、「このようなことがイスラエルの中で見られたことは、これまで一度もなかった」と言った。しかし、パリサイ人たちは言った、「彼は、悪霊どものかしらによって悪霊どもを追い出しているのだ」。イエスは、すべての町々村々を巡り歩いて、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった。

\*\*\*\*\*



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 主 光 榮

は なんぢに き す 。  
爾 歸

※聖体礼儀③ へ